

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業）
分担研究報告書

先天性および若年性の視覚聴覚二重障害の難病に対する
医療および移行期医療支援に関する研究

研究分担者 氏名 高木明 地方独立行政法人静岡県立病院機構
静岡県立総合病院 感覚機能センター センター長

研究要旨

著者は静岡県立総合病院の感覚器センター長の他に、2020年に設置された移行医療部長として、県立こども病院の心疾患術後の成人を受け入れるべく、成人先天性心疾患外来に関与している。県立総合病院と県立こども病院は同じ静岡県立病院機構に属しており、移行医療連携が比較的容易と思われたが、2つの病院の設立以来の文化の差、患者の医療に対する期待度の差、などよりスムーズな移行は必ずしも容易ではない。移行医療の成人医療としての受け入れの立場から、問題点を考察した。

A. 研究目的

県立こども病院に令和3年4月に移行期医療支援委員会、ならびに成人移行外来センター設置がなされ、成人医療を担うべく静岡県立総合病院とのスムーズな連携が期待されたが、現実には両者の体制のずれが見られた。移行医療部長、静岡県移行期医療推進協議会委員としての経験から問題点を考察した。

B. 研究方法

報告、見聞例からの考案。

（倫理面への配慮）

なし

C. 研究結果

1. 小児診療と成人診療の違いへの対応が必要

1) 専門知識

小児疾患（原疾患）の診療は成人施設ではわからない

成人疾患（加齢に伴い発症する悪性疾患、生活習慣病など）の診療は小児施設ではわからない

2) 患者の診療時間

成人施設では1人の患者の診療時間が長い

成人施設では1人の患者の診療時間が短い

3) 診療期間

成人施設では落ち着いた患者は開業医へ紹介する

開業医は難病診療がわからないので受けてくれない

4) 成人施設では複数の専門科別施設にわかれる

患児に合った成人施設を探す紹介元医師の負担が大きい

D. 考察

こども病院と成人対象の病院ではそもそも対象患者、疾患の相違から、施設の構造、職員数、診療科、母子の支援体制など病院そのものの文化が異なる。当然、患者側からはそれが見えていない。多くの場合、前段で述べたような差があって、こども病院の対応の方が手厚いので成人病院移行後に同様の医療を期待する患者の要望に応えることが難しい。このことは患者のみならず、送り出すこども病院医師もまた、十分に成人対象の病院の状況が理解できているとは言い難い。具体的には一般に成人対象の病院では疾病は臓器単位で看られ、こども病院の様に発達を含め、全人的対応ができる診療体制、科目体制になっていないので、保護者、児への全人的対応がむづかしい。また、成人病院では病状の落ち着いた患者は病診連携で開業医に経過観察を依頼することが通例であるので、移行医療の対象に上がる比較的落ち着いた患者は忙しい成人病院の対象ではない、という認識がある。逆に落ち着いていない患者を引き継げる医療水準を持ち合わせていないこともある。そのため、年齢的に移行医療対象児であっても病態が不安定であるとか、あるいは保護者の希望からそのまま、小児病院に留まる例もある。今後、患者、医師、社会の側面からの移行医療への理解、意識改革が必要と感じる。

E. 結論

- ・移行期医療推進は望ましい流れであるが、そのスムーズな移行のための環境は未整備である。
- ・医療、患者、社会的支援体制を含めた地道な努力が行政とともに必要。
- ・診療科目によっては小児から成人まで診療可能な科もあるが、先天性心疾患をはじめとする先天性疾患を全人的に診察できる成人病院医師は少ない。診療科の特質を考慮した体制整備を。

F. 研究発表

1. 論文発表
該当なし
2. 学会発表（発表誌名巻号・頁・発行年等も記入）
該当なし

G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

該当なし